

昔むかし の キンダーブック

③

子どもと共に見つめる

灰谷知子

(幼稚園教諭)

園長室の書棚にある、古くから大事に保存されてきた本たち。その中に、キンダーブックもひっそりと並べられている。八十年以上の時を経た絵本を手に取ると、新鮮な驚きや発見がたくさんあった。

魅力的なタイトル

ずらりと机上に並べると、一冊ずつの特集が多岐にわたっていることがわかる。前々号の春号で取り上げた「あり」などのように、自然界のさまざまな動植物に視点を置いたもの。紙面いっぱい広がる絵を見てみると、

今すぐにもその実物を手に取りたくなるような魅力にあふれている。そして、「からだをじょうぶに」「せっけん」など、子どもを取り囲む身近な生活を取り上げたもの。その時代の暮らしぶりが目に浮かぶよう興味深い。

「つち」(第十集第十二編)を読む

はじめに、数ある魅力的な絵本の中で私の心に留まった第十集第十二編「つち」(昭和三年三月発行)について簡単にご紹介する。



▲画像1「つち」表紙（昭和31年）

表紙

子どもが何かをお庭に埋めている絵（画像1）。この号は三月の発行。春がもうそこまで近づき、家庭や幼稚園でも芽生えを感じる季節だろうか。子どもが今、まさに暮らしている身近な場面からこの絵本の世界が始まる。

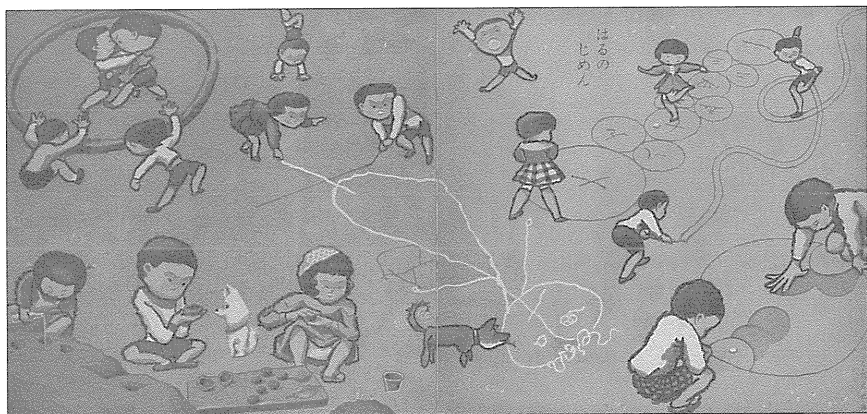
はるのじゅん

見開きいっぱい広がる子どもたちの遊び

（画像2）。黙々と穴に水を注いでいる子。白熱する相撲は、服もめくれ上がり、応援する子たちの歓声が聞こえてくるようだ。石けりをする子は、その跳ね上がった足先から軽やかなステップが伝わってくる。昭和三一年、その頃の遊び場の子どもたちの躍動感が伝わってくる。この絵本を手にする幼児よりは少し大きい子どもたちのようにも見える。広場で目にするお兄さんお姉さんへのあこがれのまなざしで、子どもたちはこの絵に引き込まれたのではないだろうか。

つちのなか

野山で枝を拾ったり花を摘んだりする子どもたちの下に広がる、土の中の世界が生き生きと描かれている（画像3）。子どもたちはどんなことを感じながらこの絵を見ていたのだろうか。「カエルが眠そう」「アリは何食べてるの？」子どもたちの声が聞こえてきそう。



▲画像2「つち」(昭和31年)から - はるのじめん -



▲画像3「つち」(昭和31年)から - つちのなか -

お茶わんのてれおわん

「つち」の特集の最後は、お茶わんを作るおじいさんと、そこに寄り添う子どもたちが描かれている。土そのものを描いてきた最後に、土から作り上げられる身近なお茶わんに焦点が当てられている点が興味深い。「これも土からできているんだね」。夕ご飯を囲みながら、そんな会話を親子で交わしたのだろうか。

「見て見て」～会話が生まれる～

子どもの身近な視点からだんだん広がっていく「つち」の世界。この一冊の絵本を囲む子どもたち、そして親子のたくさんの声が聞こえてくるような気がした。

もちろん一人で見ていても十分楽しいこの絵本。でもこの絵に引き込まれると、誰かとそれを共有したいという気持ちが強くわき上がってくる。それは私も同じだった。園内で

たくさんのキンダーブックを並べた時、思わず「見て見て」と園の同僚に声を掛けていた。

走る生き物たち

「動物が走ってる！」それは第十四輯第四編「ハシレハシレ」（昭和十六年七月発行）を見ていた時に上がった声だ。表紙は子どもが学帽をかぶってメリーゴーランドの馬に乗っている絵（画像4）。そして、絵本の中には、さまざまな乗り物が描かれている。サンリンシヤ、バシヤ、ケーブル……。全編カタカナで



▲画像4「ハシレハシレ」表紙
(昭和16年)

書かれているこの時代。地下鉄、市街電車、そして「シヨウセンデンシヤ」の三層が描かれる近代的な絵に驚いた。「省線電車」と漢字を当てることは、後から調べて初めて知った。

そんな、近代的な乗り物がたくさん描かれている絵本の全ページにわたり、動物、虫が走っている絵が帯状に描かれている(画像5)。猫が走る姿はよく目にするかもしれない。でもカタツムリは走ると言うのだろうか。ゾウが走ったらどんな地響きがするの? キリンの一步はどれだけ大きいのかしら。たくさんのことが気になり、面白くなってキリがない。「どれが一番速い?」なんて考えたら、話題が尽きないかもしれない。実際に見に行ってしまうおうか?

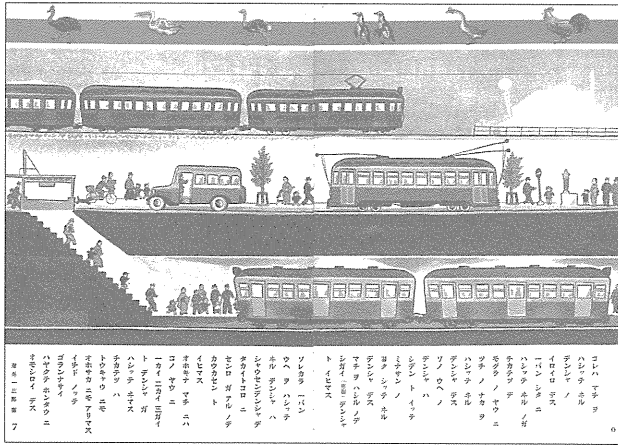
見つける

キンダーブックの世界に引き込まれていた私に、こんな倉橋惣三の言葉があるわ、と読

み聞かせてくれた同僚の言葉が胸に響いた。それは「ハシレハシレ」の冒頭にひっそりと、でも確かなメッセージを持つて書かれていた。

「なぜ走るのかしら」。子ども心にも、さうした問題が心に起らないとは限りません。しかし、さういふことを考へる隙もない程、速く走つてゐること其のこを見つめてゐるのが、幼い子の心です。(中略)もの事を一々説明してやるばかりが子どもに科擧させることではありません。子どもに、目をこらし心をつぎ込んで、もの事を見つめさせることが、先づ大きな科擧教育です。そこで、子どもと同じやうに、もの事を、そのまゝに楽しみ見つめる力が、わたくし達にもなくてはなりません。

キンダーブックの絵には、心を引き込み、見つめたくなるパワーを感じる。その「見つめる」という行為の中には、さまざまな思考



▲画像5「ハシレハシレ」(昭和16年)から

があふれているように思う。「なるほど」という納得「何で？」という疑問、「そうだよね」と共感を求めたくなる心……。キンダーブックという絵本を間にして、子と子が、子と親が、子と大人が、出会い、共に味わい、新たな

な世界を広げていく可能性があることを感じ、私はわくわくした。そして、子どもと共に暮らす中で共に「見つめる」ことから生まれるものを大事にしたいと、改めて強く感じた。

結びに代えて

さて、そんな私がどうしてもしてみたくなつたこと。それは、今共に暮らす幼稚園の子どもとキンダーブックを見たいということだ。以下に、最初にご紹介した「つち」を子どもたちと見た時のつぶやきの一部を載せる。

A児「何で土の中にカエルがいるの？」**B児**「冬眠だよ」**A児**「でもさ、これ冬じゃないよ。だって雪がない」**C児**「でも寝てるよ」**D児**「春なのに？」

春なの、冬なの、どっちなの？ ちよつとした戸惑いから季節の変化に思いを巡らしているようだった。こんな子どもの思いや考えに触れる時間は、豊かで幸せなひと時だ。